

令和6年度 愛媛・大分交流会議 議事録

開催日時：令和6年10月28日(月) 15:20～16:20

開催場所：愛媛県松山市坂の上の雲ミュージアム2階ホール

出席者：愛媛県知事 中村 時広

大分県知事 佐藤 樹一郎

1 開式

(愛媛県 企画振興部長)

それでは定刻となりましたので、令和6年度愛媛・大分交流会議を開催いたします。

私は、本日司会・進行を務めさせていただきます愛媛県企画振興部長の山名と申します。よろしくお願いいたします。

本日の会議は、ただいまから16時20分までの60分間を予定しております。

開会にあたりまして、中村愛媛県知事からご挨拶いたします。

2 開会挨拶

(愛媛県 中村知事)

本日、佐藤知事におかれましては、愛媛県までお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

大分県と愛媛県の交流会議は、かつての広瀬知事の時代に始めました。残念ながらコロナ等の影響により、平成29年を最後に少しばかりお休みをしておりましたが、佐藤知事をご就任され、この交流会議を再開しようということで、この度、本県で開催する運びとなりました。本来ならば、今年8月に大洲市において開催予定でありましたが、台風10号の影響により延期をし、今日に至った経緯があります。場所を移して、ここ坂の上の雲ミュージアムをお借りして、開催させていただきます。

佐藤知事はかつて大分市長を務められ、私も松山市長を務めた経験がありますから、それぞれの市行政への思い出があると思いますが、ここ坂の上の雲ミュージアムは私にとって、政治家としての青春そのもので、生涯忘れ得ぬ空間でもあります。小説をモチーフにした町づくりをするという、ある意味では壮大なチャレンジでございましたけれども、市民の皆さんの「何を考えているのだ」というような空気の中でスタートをいたしました。町づくりに坂の上の雲を活用する許可を得るための司馬家との交渉、それからミュージアムの完成、ドラマの放映、本当に忘れ得ぬ思い出がいっぱい詰まっている空間でございました。今日は、館長と学芸員に案内してもらいましたけれども、その思いが引き継がれ、発展しているのを見て、本当に心から嬉しく思いました。佐藤知事もその一端を感じ取っていただいたのではないかと思います。

大分県と愛媛県は地理的にも、またこれまでの歴史の中でも、人の交流、産業の交流の

盛んなどころでございますけれども、この交流会議を通じて、また新たな可能性というものに結びついていくことがあるのではないかと心から期待をしております。今日は限られた時間ですけれども、どうぞよろしくご意見申し上げて、歓迎のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

(愛媛県 企画振興部長)

中村知事、ありがとうございました。

それでは、意見交換に入らせていただきます。意見交換については、中村知事に進行をお願いしたく存じます。

3 意見交換

(1) 観光振興

【1】欧米豪からのインバウンド誘客促進に向けた広域連携について

(愛媛県 中村知事)

それでは、意見交換の進行を私の方で務めさせていただきたいと思っております。

まず1つ目の議題ですけれども、観光振興についてでございます。この議題は、「欧米豪からのインバウンド誘客促進に向けた広域連携について」と、「サイクリングを活用した誘客促進のための広域連携について」の2つの項目で意見交換をさせていただけたらと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

まずは、欧米豪からのインバウンド誘客促進に向けた広域連携について、私の方からまず発言をさせていただきたいと思っております。

大分でも、コロナ5類移行後、国際線の直行便の再開が始まっていると思っております。愛媛県でも、現在、韓国が週14便のソウル線、週6便の釜山線、台湾が週3便の台北線と、3つの路線が再開していますけれども、これに加えて、滞在期間が長く、1人当たりの消費額も大きい欧米豪からの誘客促進を視野には入れているのですけれども、いかんせん、こちらのエリアの方々にとっては、東京、京都、大阪、福岡、北海道ぐらいは知っているけど、あとの地方についてはどこもどんぐりの背比べで、知名度があるわけではない。本当にそういう意味では、どうやって攻めたらいいかなといろいろ考えているところがございます。

そういう意味で、大分県や広島県の方が、まだ地の利の関係も、そしてまた取組みもあって、誘客できているケースが多いと思っておりますので、できれば、そういったところに来られるインバウンドのお客さんが本県にも来ていただけるような仕掛けができればと思っております。特に鉄道路線に加えたフェリー航路等の活用というのは、大分県とは、相乗効果でいろいろな役割を果たしてくれるのではないかとというふうに期待をしております。

外国人の宿泊客を増加させるためには、今申し上げたような国ごと、地域ごとの動向をしっかりと見極めたうえでアプローチの手法を考える必要があるかと思っております。大分県と愛媛県が、お互いに持っている異なるコンテンツを結びつけて、メニューを多角化するこ

と、そしてそれを一体的にプロモーションすることが非常に有効ではないかと考えております。

今年度は大分県・せとうち観光推進機構・愛媛県とで連携し、オーストラリアの現地で開催される商談会にも参加をした他、現地メディアを招聘したツアーの実施を検討しているところでございます。加えて、別府及び臼杵、八幡浜航路を利用して、本県を訪れるインバウンド旅行者に対しまして、フェリー会社と連携してアンケート調査を実施することとしておりまして、こうした分析を行う中で、フェリー会社にも結果をフィードバックして、インバウンド誘客施策の検証、ブラッシュアップに繋がりたいと思いますので、ぜひ一緒になった取組みを進めていただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

続きまして、佐藤知事の方からよろしくお願いいたします。

(大分県 佐藤知事)

中村知事、本当にありがとうございます。先ほどミュージアムを視察いたしまして、大変感動しました。それについては、また後ほどお話しをさせていただきます。

欧米豪からのインバウンドの誘客でございますけれども、大分も、コロナのときは大変厳しい状況が続いておりましたけれども、コロナが終わりまして、やっとコロナ前の水準までインバウンドが増えております。

やはり韓国、それから台湾、香港、そういうアジアの方が多いのですけれども、それに加えまして、米国でありますとか、フランスでありますとか、オーストラリア等の欧米の方々も徐々に増え始めております。

特にヨーロッパについて言えば、例えばリーフデ号が臼杵に漂着をしまして、そこに乗っていたのが三浦按針でありました。そういう話が住んでいる人から発信をされるに伴いまして、オランダの方々も臼杵の黒島にたくさん見えております。それから臼杵の石仏は、これもフランス人の在住の方が臼杵にいるものですから、発信をさせていただきました、非常にフランスの方が増えております。そういう状況で、欧米の方々が徐々に増えております。もう1つは、ラグビーのワールドカップをやりまして、大分で5試合やりましたので、その関係で非常に大分に親しみを持っていていただいている応援の方々も増えているかなと感じております。

それから台湾の方々も非常に増えておりまして、これは熊本のTSMCの関係でそのまま大分まで足を伸ばしていただいております。それからやはり別府と湯布院にはある程度のブランドがあるものですから、そういうところも目指して来られる方が増えてきておりますけれども、何といても、瀬戸内、特に愛媛との連携ができますと、例えば別府と道後温泉でありますとか、温泉以外にも、特に愛媛県は、いろんな観光資源がたくさんありますので、そういうところで連携をしながら進めていくというのは大変素晴らしいことだと思いますし、特に来年は万博がありまして、万博で関西に見える方々がそこで終わるのではなくて、瀬戸内を通過して、四国でありますとか、九州まで来ていただく。そういう情報発信をするための連携をぜひやらせていただけるとありがたいなと思います。

大分に宇佐神宮がありますけれども、来年ちょうど 1,300 年祭に当たりまして、これも周年行事で大きな行事になりますので、万博のときに合わせて、魅力の発信をしたいと思っておりますけれども、中村知事が先ほどおっしゃったオーストラリアでの情報発信のための共同出展でございますとか、市町村レベルで連携をしながら、八幡浜をはじめ、特に愛媛県の西部の皆様と大分の市町村と連携しながらいろんな取組みしておりますので、そういうものもさらに進化をして、そして共同で魅力を発信する、或いはメディアを通した PR をやらせていただければ大変ありがたいなというふうに思っております。よろしく願います。

(愛媛県 中村知事)

はい、どうもありがとうございます。

欧米豪は特に滞在期間が長いということもあって、やはりメニューの充実というのが引っぱり込むためには不可欠であろうと思っておりますし、またその行き来が、フェリー、船を使っていくっていうのも非常に魅力的なコンテンツになり得るのではないかなというふうに個人的にも思っています。ぜひよろしく願いいたします。ありがとうございました。

【2】サイクリングを活用した誘客促進のための広域連携について

(愛媛県 中村知事)

それでは続きまして、サイクリングを活用しました誘客促進のための広域連携について、意見交換をさせていただけたらと思います。こちらについては佐藤知事さんの方からお願いいたします。

(大分県 佐藤知事)

愛媛県さんも前から自転車については力を入れておられて、しまなみでありますとか、そういう取組みを大分もぜひやっていきたいなということでございます。

九重連山でありますとか、海岸線でありますとか、大分もサイクリングに適した非常に美しいコースがたくさんあります。特に、昨年九州経済連合会が中心となりツール・ド・九州を始めまして、昨年と今年に福岡と熊本と大分の3県で、これ UCI、世界自転車競技連合の公認レースとして、レースを行うということを始めしております。昨年、大分は、オートレース場のオートプレスというのが下にあるのですけれども、その上の方から下の中心市街地を目指して降りていくようなレースが行われました。今年は APU、アジア太平洋大学を出発点とし、やまなみハイウェイを通りまして、また下の中心市街地の周回コースでゴールするというレースになります。

来年、実は、宮崎県との県境にある大分県の佐伯というところを、県境を跨いでコースを作るというようなことで準備をしております。そういう UCI のレース、これももう一つ、大分市の方も、前から大分サイクルフェスということで、レゾナックドームというラグビー場があるのですけれども、その周り 10 キロのコースを 13 周する 130 キロぐらいのレー

スをしており、これも UCI の公認レースであります。割と日本中の、そして世界から強豪が来ますので、世界のサイクルファンが訪れてくれている。

その他にもツール・ド・佐伯でありますとか、サイクリングでありますとか、それからレースを使ったまちづくりというのを進めておりますけれども、こういうレースを、さらに県を跨ぎまして、愛媛県と、途中でフェリーとかで渡る必要が出てくると思いますが、一緒に走るとか、一緒に走るような、そういうふうなことが行われると非常にいいなと思います。またやはり、しまなみ海道のサイクリングというのは非常に魅力的だということで世界的にも著名になってきておりますので、そういうときにお互いに情報発信をしますとか、そういうふうなことができる大変ありがたいというふうに思っております。

(愛媛県 中村知事)

はい、ありがとうございます。

それでは私の方からサイクリングについてお話させていただきたいと思いますが、サイクリングについてお話する前に思い出したことがあります。

今、佐藤知事から宇佐神宮の話がありましたが、かつての歴史を紐解いてみると、その昔、宇佐神宮の神様の間で紛争があった時期があって、その紛争から逃れるために、宇佐神宮の神様が、実は船に乗って、愛媛に渡って避難をされているのですよ。60 日間ほど滞在されまして、その歴史を刻んだことを残すために名付けられた市があります。

それが八幡の八幡浜市です。

(大分県 佐藤知事)

そうなのですか。

(愛媛県 中村知事)

そういうことで60 数日間いらっちゃって、またお戻りになられたという、そういう歴史の記述がありまして、これを知っている人は八幡浜市の人でもほとんどいないので、ちょっと語り継いでいかなければいけないなというふうに思っていたことをふと思い出しましたので、ご紹介させていただきました。

(大分県 佐藤知事)

それはありがとうございます。私も知りませんでした。

ご存じの通り、愛媛県の八幡浜市と大分県の別府市は繋がっていますので、別府や臼杵の皆様にもしっかり紹介しておきたいと思っております。

(愛媛県 中村知事)

はい、宇佐神宮から来ている名前です。だからそこに、八幡様が上陸された浜というこ

とで、八幡浜という名前が付いたということです。

それでは、サイクリングについてですけれども、実は、私が就任した14年前に考えていたのは、「しまなみ海道を世界に情報発信」という公約でした。具体策があったわけではなかったのですけれども、ただ就任していろいろ考えた結果、四国には3本の橋が架かっていて、唯一自転車歩行者専用道路を持っているのがしまなみ海道であり、この個性を生かさないとはいえないということで、サイクリングを通じた情報発信に結びつけていこうというのがそもそものスタートでありました。

その時、短期の戦略としてはしまなみ海道をサイクリストの聖地に、中期の戦略として愛媛県全体をサイクリングパラダイスに、長期の計画として、この時点では、四国全体に呼びかけてサイクリングアイランドにという、短・中・長期の目標設定をしながら10数年歩んできました。

特にサイクリングのしまなみ海道については、景観等々には自信があったのですが、当時はまだロードバイクやクロスバイクに乗る方というのは、もう本当に趣味でやられている若い人たちというイメージがあって、年齢がある程度いかれた方とか女性がああいう格好してロードバイクでサイクリングするという感覚がなかったのですね。

ただ、欧米ではもうそれが当たり前になっていて、アジアでも広がりつつあるということを受けて、これをやろうということで当時はこんな年齢でもできるのだということを知ってもらうために、最初の犠牲者は県庁の管理職、次が市長さんと町長さん、次が経済団体の社長の皆さんと、そういう人たちがきちっとしたユニフォームで、ヘルメットを被って、クロスバイクやロードバイクで走り回るのを皆さんに見てもらうことで、敷居は低いという、そういうところからスタートしました。

そんなことをやっていくうちに、やっぱりどこもやってないことをやらないと情報発信できないなと思ったので、これはもう個人で走ってみたいという、わがままな願望もありまして、高速道路を止めたらどうなるのだと当時の担当者に聞いたら、「絶対に無理です。何を考えているのですか。」と言われたのですが、いやだからやる価値があるのではないかと行って交渉を開始したのですけれども、当然のことながら前例がないので、本四高速は「絶対に無理です。」という回答で、国交省に行ったら、「何を言っているのですか。」ということで、当時は、実は広島はまだそこまでという感じだったので、愛媛側だけでやろうということにして、交渉の2年後、「1回きりですよ。」ということで、しかも「何かあったら、中村さん、あなたが全部責任を取ってくれよ。」と。

さらに3つ目の条件があって、「3時間で元に戻してくれ。」と。「1秒でも超えたら、二度とできないと思って欲しい。」と言われてスタートしました。それで、愛媛側だけで高速道路を3時間だけ止めるイベントをやりまして、制限時間を超えないために県庁職員も頑張ってくれて、3時間の喧嘩を買ってきたから、受けて立つのでみんな協力してくれと。そのため、休みの日にボランティアでカラーコーン撤去の練習を、当時の職員たちがやってくれまして、本番に臨んだのですよ。

今でも奇跡の時間と呼んでいるのですが、結局、2時間59分56秒で、4秒の奇跡を起

こして戻せた。やはり全国で初めてのことだったので、海外からも含めて大勢の方、3,000人ぐらいの方が来られて、大盛況だったのですね。これが扉を開くことになって、次から広島も一緒にやっていただけることになり、国交省に行ったら、あれだけ1回きりですよと言っていた当時の審議官が、「中村さん、よかったね。次、いつやろうか。」というようにがらっと変わって、ある意味では、日本のサイクリング政策の転換期にもなったかなというふうには思っています。

実は昨日、サイクリングしまなみ2024が開催されました。今回は職員の負担もあるので、大々的な大会は4年に一回にしています。このときは7,000人規模の大会なのですが、高速道路を6時間走れるようにして、中間年の2年目は、負担を考えて、中規模の3,500人の大会にしています。

昨日は3,500人の大会でしたが、しまなみ海道はおかげさまでアメリカのCNNで、世界七大サイクリングコースの1つに選定されましたので、海外からもかなり注目が集まってきてまして、昨日は3,500人のうち約500人が外国の方で、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアという欧米豪からも来られて、多いのは台湾、中国、アメリカ、韓国など、国外の27ヶ国と地域から参加をいただきました。各国の自転車関係者も来ていますので、ここからまた次なる仕掛けに持っていこうかなという戦略を今練っているところでございます。

もちろん、イベントをやるだけでは普及には繋がらないので、並行して、安全対策であるとか、或いは普及活動であるとか、或いはE-バイクを活用した裾野拡大の展開であるとか、いろいろなことに取り組んでいます。

広瀬元大分知事のときにも一緒にやりましょうということで、ブルーラインを共通化するとか、いろいろな取組みが進んでまして、今、しまなみは広島県とやってまして、四国の他の3県ともやっていますので、ぜひ大分県とも何かできたらと思っていますので、ぜひよろしくお願ひ申し上げたいと思います。

(大分県 佐藤知事)

はい、ありがとうございます。

ぜひ、例えば、熊本の方からやまなみハイウェイを通過して、そして、例えば佐賀関に着いて、フェリーに乗って三崎に上がるとか、何かいろいろなコースが考えられますし、中村知事はサイクリストでいらっしゃるというふうに伺っておりますので、やはり率先して走っていらっしゃる。おそらく先ほどおっしゃったように、ハードルを下げるということで、最初に管理職の方も一緒に走ろうと言ってから走っておられるのではないかと思いますけれど、要するに、健康とか、それからファッションブルなので、たくさんの皆さんが楽しんで、そういうイベントになると思います。

ぜひそういう取組みを一緒にやらせていただきます。ありがとうございます。

(2) 防災・減災対策

伊方発電所の安全対策及び防災対策について

(愛媛県 中村知事)

ありがとうございます。それでは、次の議題に移ります。2つ目の議題は、もうこれは本当に、私どもの方が大変お世話になっておりまして、いつも大分県のご協力をいただいていることに、この席をお借りして改めてお礼を申し上げたいと思います。

防災・減災対策についてでございます。特にこの議題は、伊方発電所の安全対策及び防災対策について意見交換をさせていただけたらと思います。

大分県とは、平成23年度に伊方発電所の異常時における愛媛県からの通報連絡のルールの構築や、特に本県からの避難者受入れなどに係る確認書を当時取り交わさせていただきまして、ご協力をいただいております。

平成27年度からは、両県の防災部局の人事交流も行っておりまして、避難者受入れに関して、大分県内各市町村の避難先の候補施設、すでに今お聞きしますと18の大分県の市町村、235施設を、こちらの方でも、県の地域防災計画に反映をさせていただいているところでございます。

今月17日に行われた原子力防災訓練における海路避難では、別府市の方で伊方町住民の受け入れ訓練も実施していただきました。本当に毎年やっていただいて、来年まではどうなるかわからないのですけれど、国主催の防災訓練もできれば1回やってみたいと思っております。ちょっと大掛かりな訓練となると大分県のご協力がどうしても、今まで以上に必要になって参りますので、もし正式にこれが実施されるようになったらよろしく願い申し上げたいと思います。

またザッと申し上げますと、伊方については、実は私就任した3か月後に、東日本大震災だったのですよね。ですから、知事になってすぐに一番取り組まざるをえなかったのが、伊方発電所の安全対策でございました。

ちょっと特殊なやり方をやっております。1つには全国で愛媛県だけがやっている通報連絡体制があります。これは通常の他の原子力発電所というのは、何かが起こると、現場から本社に連絡がいて、本社が行政に連絡をし、そして記者会見すると。こういうのが一般的なやり方なのですが、愛媛県の場合は全く異なっておりまして、伊方発電所に何かが起こると本社と同時に、愛媛県に連絡が入っております。

あらかじめルールを決めて、この区分であれば即時公表とか、1か月後に公表とか、かなり細かく細分化されてはいますが、マスコミへのプレス発表は、愛媛県が行っています。なぜこれに拘ったかという、隠し事をさせない。ともかくこの連絡体制が守られなかったら、電力会社との信頼関係は崩れ去るというプレッシャーを常にかけているので、これはきっちりと、私がいる間もしっかりと連絡が入っているということはお知らせいたします。

それから2つ目は、地形上、内海側に位置している伊方発電所は、海拔10mのところ立地しており、前面の海域の水深が80mということです。海水量そのものが、東日本の太平洋側と全く異なる条件となっており、こういったことを分析していくと、どんなに大き

な南海トラフが襲ってきても、宇和島あたりはもちろん 10m以上の津波が押し寄せるリスクはあるのですが、伊方の方は、今言ったような条件があるので、2 mか3 mがマックスでございます。むしろ、津波によって全電源が喪失するというリスクは非常に少ない。限りなくゼロに近い。ただし、揺れによって起こる事故のリスクは同等にあるというふうに思います。

その結果、電力会社に2つの要請を個別にやっけていまして、国が求める可搬型非常用電源は当たり前のこと。国が求めるものは必要最低条件であるというので、県としてはアディショナルに2つの要請をします。

1つは、国が求めているのだけれども、さらに電源対策を実施して欲しい。もう最悪電源さえあれば、海水を掛け止めることができますので、そこで、伊方発電所のさらに上に変電所があるのですけれども、そこから1号機、2号機、3号機に、国は全く求めているのですが、送電線を新たに引き込みまして、第3の電力ルートを作ってもらいました。これも完成しています。そこがプラスアルファの電力供給。

もう1つは揺れ対策として、伊方の場合は、当時は 570 ガルの基準地震動だったのですけれども、国の方の新規制基準適合性審査において 650 ガルと変更されました。愛媛県はそれでも駄目だということで、稼働中の伊方3号機については、更なる揺れ対策をしてくれということで、国が求めているのは基準地震動 650 ガルへの耐震安全性なのですが、安全上重要な設備について、おおむね 1,000 ガルの耐震対策、これを実施済みでございます。

このように、地形によって原子力対策は異なって参りますから、これは国に申し上げているのですけれども、全国一律で考えられるものではないから、県は独自で電力会社にも要請するし、そこはしっかり見ておいて欲しいっていうことは申し上げています。

事程左様に、かなり練りに練った要請を四国電力には申し上げてきた経緯がありまして、四国電力はやはり大きな東電とは違って、非常に真摯に、東電が真摯ではないとは言いませんけれども、本当に真摯に全部受けとめてくれています。だからそのことは自信をもって報告ができるのではないかなというふうに思いますので、お知りおきいただけたらというふうに思います。

それともう1つは、1号機、2号機については、廃炉が決定しております。その作業について、これもかなりの年月がありますけれども、準備に入っています。3号機はまだ30年ですから、そんなに古くない形になっていますので、それでも、1つ1つの対策は積み重ねていきたいというふうに思っています。

今問題は、国の方に、これも常に申し上げているのですが、最終処分が決まらない。ということは、毎年毎年、使用済燃料が増えていく。いずれパンクするというので、四国電力の方から乾式貯蔵を、ということで話がありました。でも乾式貯蔵を安易に受けると、永久貯蔵になりかねないので、一時的な貯蔵であることを四国電力や国が宣言しない限りはできないということを言い続けてきたのですが、これはもう一時貯蔵であるという言質を取っています。

乾式貯蔵の方については今、工事が始まっていますけれども、やっぱりプールに入れる

よりは、結構長い間、冷却しますので、プールの場合は、水から露出すると、あつという間に温度が上がっていきます。乾式貯蔵はプールで 10 数年かけて冷却した使用済燃料を、特殊なキャスクに閉じ込めます。例えば揺れて倒れても、放射性物質を放出しないので、安全性はあると思います。ただ永久にとはいかないということだけは釘を刺していくところでございます。

こういう形で、伊方発電所について、国に対しては早く最終処分場を国の責任で進めてくれということを、引き続き言い続けていきたいと思っております。以上です。

(大分県 佐藤知事)

原発立地県として、本当にいろいろな取組みをしていただいたことに対して、感謝申し上げます。

例えば、大分市の佐賀関は松山市よりも伊方発電所に近いということもありまして、伊方発電所の安全性に関する関心というのは、大分県民、市民、大変高いです。例えば、大分地裁で訴訟が起こったり、それから議会でも、例えばヨウ素剤の配布はどうなっているのかとか、通報の問題等が取り上げられております。

前回、4月17日に地震があったときにも速やかに通報いただきまして、ありがとうございました。今後も、速やかな通報をぜひお願いをしたいと思います。

それから、私も先ほどのような状況がありますので、伊方発電所を見学させていただきまして、650ではなくて1,000ガルの耐震でありますとかいろいろな取組をしているのも見せていただきました。

そういう意味で、四国電力さんも非常にいろいろな努力をしておられるということは、もう見せていただいたのですけれども、引き続き、やはり安全が何より大事ですので、お願い申し上げます。

避難訓練ですけれども、特に伊方発電所よりも西に住んでいらっしゃる方々は、何かあったときにやはり大分側に避難をするということで、もう毎年避難訓練をしていただいております。今年も10月の16、17日にありましたけれども、これはやはりいろいろな事態を想定しまして、避難訓練をしていくということは大変重要だと思いますし、私どももしっかり協力をさせていただいて、受け入れ、それから大分に来ていただいた後にどうするかというようなことも含めて、やはり協力しながら取り組んでいくということが必要だと思います。

その関係でいうと、ちょっと後程広域交通の中でお話申し上げますけれども、伊方の高門町長は、いつもやはり船だけだといざ港に何かあったときに非常に心配があるので、陸道で繋がっているのがある意味で命の道になりますということもおっしゃっておられるので、私どもとしてはそういうことも含めて、検討していくことが大事であると思っておりますし、もう1つは、熊本にTSMCができましたけれども、九州各地に半導体関連の立地が進んでおります。そうしますと、電力の需要が増えてくるという意味では、伊方発電所が、電力の安定供給を担っていただいているということも大変重要な点だと思います。

そういう意味で、これは電力会社の検討とは思いますが、融通ができるような送電線の設置でありますとか、そういうことも将来的には課題になってくるのではないかなと思っております。

いずれにしても、1つはやはり、受入避難訓練がより実効性が高くなるようにということで、引き続き私どももしっかり取り組みたいと思いますし、もう1つは何かあったときに、避難をする必要があるようなそういう事態が発生したときには、情報伝達を引き続きよろしく願いたいと考えております。

(愛媛県 中村知事)

はい、どうもありがとうございます。

先ほど説明させていただいた日本で唯一のえひめ方式の通報連絡体制、これは本当に有効だと実感しています。もう絶対隠し事できないですから。

例えば、あそこの通路に見馴れないゴミが落ちていたとか、もうこれも日常と違う変化なので、それも全部連絡が入ります。しかも、本社と同時にこっちにも入るようになっていきますから、僕もお会いするたびに、電力会社にはここが生命線ですと、この通報連絡体制が崩れたらもう、本当に信頼関係は木っ端微塵になるというプレッシャーを常にかけていますので、逐一細かいことでも報告が入って、これを受けて愛媛県から大分や周辺の県にも連絡が行くという体制が作られていますので、これは、ご不安を感じていらっしゃる大分の皆さんにぜひ説明していただけると、他でやってないこと、通報連絡体制をやっているよということは、安心感にも結びつくのではないかと思いますので、お知りおきいただければと思います。

それから、今回やこれまでの訓練でもう本当にご心配いただいたとおり、西側については、海しかなくなる場合すら想定しないといけないので、自衛隊や海上保安庁とも協力をいただきながら、最善最新の設備や移動手段を駆使して訓練を積み重ねているのですけれども、大型船の実地訓練をやったり、LCAC という大型のホバークラフトで、今年は海上保安庁の小型のボート、ピストン輸送とか、港の方は三崎港も含めて、耐震強化工事を実施し、それから港が使えないときを想定してそのLCACが、小型のボートだったらこの砂浜に乗りつけていけるか等、いろいろな研究もしています。

もう1つ情報として、ほぼ完成を見たのがドローンを使った情報収集体制でして、実は何かあったらすぐにドローンが、バッテリーの関係で、10分、15分ぐらいしか撮れないんですね。佐田岬半島の全容を速やかに空撮で情報キャッチするには、複数台のドローンを駆使して、このドローンはここからここまでとか、繋いだ情報を一手にキャッチする必要があるので、これをシステム化してオートマチックに情報キャッチできるようなドローンの活用をすでにしておりますので、佐藤知事がおられた経産省にも、これはもう国の責任ですよということで、バックアップをしてもらっています。

それともう1つは、これは技術的に難しい問題があるのですけれども、もしものことがあったとき、放射線の測定値に基づき、どちらに向かうかというのを決めなければならない。

それを決める時、特に海上での測定技術というのが非常に難しく、これをぜひ研究してくれということで国の方でも、何がベストなのかということを検討してもらったところ、海上モニタリングが実現した。やがて技術を駆使しながら何か生まれてくるのではなからうかというふうに思います。

それから陸路については、本当に細長いところなので、フル活用するためには、やはり大洲八幡浜自動車道に抜ける道の整備がどうしても必要なので、伊方から八幡浜で滞留してしまいますから、八幡浜から大洲までの道路については順調に工事が進んできているところであります。

私からは以上となります。

私からは以上となります。

(大分県 佐藤知事)

ありがとうございます。

(3) 広域交通ネットワーク

豊予海峡ルート構想の早期実現に向けた取組の推進について

(愛媛県 中村知事)

それでは次の議題に移ります。

最後の議題は、「広域交通ネットワークについて」でございます。この議題は、豊予海峡ルート構想の早期実現に向けた取組みの推進について、こちらは佐藤知事の方からご発言をお願いいたします。

(大分県 佐藤知事)

私が大分市長時代も、1度、中村知事にお時間いただきまして、こういう取組みを検討したいというお話をさせていただいたことがあるのですがけれども、今、大分と愛媛を結ぶ国道九州フェリー、どんどんニーズが増えてきておりまして、今日も乗ってきたのですが、車1台とそれから3人乗っていて往復2万4,000円ぐらいの費用ですね。トラックだと、片道だけで2万円以上を払うのですがけれども、そういう料金で、もし、例えばトンネルを作って、料金を払っていただくということにすると、おそらく10年ぐらいで元が取れるという、そういうふうないろいろな研究を市長のときもやってきまして、県になりまして、またさらにいろんな視野を広げて検討しているところでございます。

ちょっとこういうパンフレットを持ってきましたのでご覧ください。

大分県広域交通ネットワーク研究会というものを作りまして、奥野先生という前の国土審議会の会長さんに座長になってもらいまして、検討したものを取りまとめたものであります。

大分と言いますか、九州の方の視点からこう書いておりますけれども、この豊予海峡 14

キロですが、これを繋ぎますと、非常にいろいろな効果が期待されるという報告書を作ってもらいました。

右の下にありますけれども、九州の方からしますと、半導体や自動車、農林水産物というものが非常に集積を続けておりますけれども、こういうものを、さらに四国、そして本州へと繋げていくうえで、非常に効果が期待されるということと、それから交流の促進ということで、関門、九州に入るのは関門が今、陸道で繋がっていますけれども、それに加えて、豊予海峡で繋がることによりまして、人流・物流が非常に増大をする。それから災害に強いという意味で、これは九州の立場でありますけれども、片方、例えば山陽新幹線とか山陽道ってよく災害で寸断されますので、その時に、四国経由で九州に入ってくるルートというのは、災害に強いまちづくりという意味では非常に効果があるのではないかとということでございます。

真ん中に少し九州の強みも書いておりますけれども、人口が大体全国の1割弱でありますけど、半導体が45%ぐらい生産しております。今、TSMCの関係もあって、大分の方でも、ルネサスでありますとか、いろいろな立地がまた進みつつありますし、このあいだ台湾に行ってきましたら、サイエンスパークをぜひ九州に作りたいと、100ヘクタールぐらいのものを3つぐらい作りたいということで、先日も台湾の経済界の皆さんが見に来たりとか、そういうようなこともあります。こういう状況があります。

それから、一番下にありますのは、農業ですね。大体九州が2割ぐらい作っているということで、こういう九州の側から見ましたときに、こういうものが、さらに繋がることによりまして、大きくマーケットとしても広がっていくと。

それからもう1つ、やはり観光としまして、九州に入ってくる人達、先ほどサイクルツーリズム等でもお話ありましたけれども、そこを四国をつなげていくことによって、四国の方も非常に大きな誘客をさらに期待できるのではないかなということでございます。

そして今検討しておりますのは、1つは道の建設でありまして、四国と九州、それぞれ高速ネットワークができて、先ほど知事おっしゃったように、今日も大体4時間半ぐらいかかりましたけれども、途中で2ヶ所ぐらい信号のあるところに降りて、そしてまた上がってくると、保内の直前のところとそれから大洲のところですね。あそこが繋がると、ずっと一体化されて、メロディーラインのところなんかは信号がほとんどありませんので、ある意味で、高規格道路と同じような感じだと思います。

そういう形で繋がることによって、高速道路のネットワークがまたネットワーク化するということの意味で、豊予海峡のところを道路で繋ぐと。これは高門町長さんがおっしゃった命の道にもなるということと、それから今は中九州横断道路の建設を進めているところであります。これは、熊本と大分の間の高規格道路なのですけれども、TSMCがその間にありまして、できると大分と熊本が150キロぐらいでありますので、2時間ぐらいであります。そこから東に突き抜けて、愛媛の方に入ってくると、例えば住友化学さんでありますとか、フジボウさんとか、半導体関係の企業さん、愛媛にもたくさんありますので、そこがまだ一体になって、ここの中九州横断道路から豊予を抜けて愛媛まで繋がっていく道、そこが半

導体のベルトになるのではないかなというようにも期待をしております。

それから新幹線の方は、四国は4県で非常に団結して取り組んでおられるというのは非常にいいですね。理解もしておりますし、敬意を表したいなというふうに思っております。お願いしたいなと思いますのは、これはもう愛媛県さんの方からいつも言っていたいていますけど、長期的に見たときに、四国新幹線というのは大阪から四国を通して、そして大分まで辿り着くのが四国新幹線で、そののちを松山止まりでもう終了となると、私たちの方としましては、これ大変重要な新幹線の計画、四国新幹線の基本路線でありますので、そののちは、やはりもう松山止まりということではなくて、大分までつなぐということ踏まえ、どこを先にやるかというのは四国の皆様の今の取組みで、それは尊重をすべきだというふうに思います。

もう1個は、東九州新幹線を今議論していますので、四国新幹線と東九州新幹線が繋がることによりまして、新幹線の方もまたネットワークになるといいますか、要するに、こういう広域交通というのは、繋がっていくというのが大変重要でございます。それによりまして、例えば鹿児島、宮崎、大分のいろいろな人流でありますとか、そういうところが四国の方と交流ができて、そして四国の皆様が取り組んでいただいているところがさらにそこからまた関西との交流ができ、関西と関東というのはリニアで1時間で繋がるという意味で、ある意味でスーパーメガリージョンが形成され、そこに繋がっていくことになるのではないかと思います。

やはり、どこかで止まってしまうということではなくて、繋がっていくことを目指して、一緒に取り組みをしていただければ大変ありがたいと思いますし、特に道のところは、中九州横断道路がもう大体、大分の方で言うと、犬飼とそれから宮河内というところが今、環境影響評価になっていまして、全線を挙げてもうほとんど環境影響評価と、それから実際に通っているところというふうになっていますので、そこを東に突き抜けていくという意味で、豊予の方の道は豊後伊予連絡道路と言いますけれども、そののちの、例えば調査を国に、すべきだというふうな要請を一緒にしていただけると、この間も副知事さんと一緒に活動をしていただきましたけど、ぜひ愛媛県さんと一緒に、この豊予ののちの道路の整備と一緒に、調査をすべきだという要請をしていただけるとありがたいなというふうに思っております

(愛媛県 中村知事)

先ほど、坂の上の雲ミュージアムと一緒に拝見させていただきながらふと思ったのが、あの時代、何もない貧乏国家が、近代国家を目指す過程で、とてつもないことを当時の政府、役人、政治家が考えていたのだなということ改めて知らしめられた思いがするのですけれども、当時の通信環境を整備するため、有線のケーブルをあれだけ海外に連なる海底ケーブルを敷設し、維新からまだ何十年しか経ってないのに、あそこまでのことをやっていたということ。それから鉄道網を全国に張り巡らせることによって近代国家を目指すという、ただ単に隣の町がやったからうちにもつけてよとかいう、そんなレベルではなく

て、非常に大胆な国家戦略というものを通じて物事が動いていたダイナミックさを、つくづく感じたところです。

そういう意味で、四国新幹線もそうなのですが、豊予海峡ルートというのも、かつてはそういう機運がこの国もあったように思うのですが、例えば均衡ある国土の発展のもとで言われていた第2国土軸であるとか、そういったものが本当に何か、すごい小ぢんまりとし始めていて、いろいろなものやっけていくというときには賛否両論もあるし、当然のことながら分析も必要なのですけども、最初の大胆な発想がなかったら変化が起きない。

この豊予海峡ルールにしても、今、東九州自動車道が完成したことによって、明らかに物の流れ、物流が変わってきたなど実感するのはやはり、九州・大分と八幡浜を結ぶフェリーの利用客の増加。全国で、フェリーであれだけ増加しているのは、他に見られないと思います。それは、東九州と道路で繋がったことによって、わざわざ福岡に回る必要もないし、時間もショートカットができる。たまたまトラックの休憩地帯にもなるということもあると思いますけども、そういったようなことも手伝って、驚くほど行き来が増えているということが確認されています。

かねてから、技術的には豊予海峡のトンネルは十分に可能であるという結論も出ていますし、あとは長い目で見た国家戦略の中で位置付けるべきだという主張を続けていく必要は痛感しているところでもあります。これは新幹線も含めての話になりますけれども、その中で、特に鉄道については、この予算というのは1,000億ぐらいでいつも止まってしまっているのです。

(大分県 広瀬知事)

そうですね。

(愛媛県 中村知事)

何かこう、ダイナミックさが無くなっているというのは本当に悲しいです。これからの日本の国際競争力を維持し、或いは発展させるためにも、ただ単に道路を新たに作るってだけの発想ではなくて、大きな目で見た産業政策の一環としてのインフラ整備、その中で道路がどう位置付けられるのか、或いは鉄道がどう位置付けられるのか。そう考えていくと、まだまだこれからであるところの中九州横断道路や豊予海峡、東九州の新幹線の方が伸びしろがあるというのは、もう誰が考えても間違いないと思うので、今、東京等のほうに集中しているからというのは、それはもう前の話です。

これからの先を考えたら、それぐらいの大胆な政策をもって、この狭い限られた国土を有効に使うには何が必要かという観点で、この事業っていうのは捉えていきたいなと思っています。

(大分県 佐藤知事)

誠にありがとうございます。

全く私も同意見でありまして、これも「日本全体に大きな効果」と書いてあるのですけれども、この裏側にまた地図があるのであるのですけれども、要するに、やはり日本全体の効率をどう高めるかとか、産業競争力をどう高めるかとか、そういう視点からどういう整備をすべきなのかという議論をすべきでありまして、もちろん地域ごとに、これが通るとこの地域は非常に人口が増えるとか、それから産業が下がるとかそういうのもあるのですけれども、やはり日本全体として見たときに、どう取り組んでいくか。

その時にやはり例えば、豊予海峡の道路のところというのは、もう4つの島の中で繋がってないのがここだけありますので、もうミッシングリンクになっております。

それから新幹線の方も、例えば敦賀と大阪を、小浜ルートにするのか米原ルートにするのかとか、そこら辺の議論がありますけれども、そういう議論が終わらないと次の基本路線を整備新幹線にするという議論もしませんということではなくて、やはり、その次の基本路線の整備新幹線でどういうふうに上げていくかという議論は、小浜ルートのところが固まらなくてもできる議論であります。

九州の方も同じで、西九州のところがまだ今、佐賀のところをどうつなぐかというのは、それが優先ですというのはいいのですけれども、それが終わらないと次の議論をしませんということではなくて、やはり今、地方創生の議論をされておりますけれども、それをするうえで、やはりこういう広域のネットワークインフラをどういうふうに作っていくかという議論を早急に進めていくべきだと思います。

その中でやはり、私たちの方は、大分を通る路線が幾つかあるものですから、こういうところを、いずれも愛媛県が重要なパートナーになってきますので、ぜひよろしく願いしたいと思います。

(愛媛県 中村知事)

ありがとうございました。

ちょうど予定していた時間がぴったりになりましたので、以上で今年度の愛媛・大分交流会議を終えさせていただきたいと思います。

4 閉会挨拶

(愛媛県 企画振興部長)

中村知事ありがとうございました。

それでは、閉会にあたりまして、佐藤知事よりご挨拶をいただきたく思います。

(大分県 佐藤知事)

中村知事、今日は本当にありがとうございました。

時間として、9時半頃に大分県を出まして、2時半頃を着けましたので、全部で5時間ぐらいかかりましたけれども、本当にお伺いできてよかったと思います。8月のときに、大洲市長さんには本当に申し訳なかったと思いますけれども、今回こちらにお伺いできま

して、そして、坂の上の雲ミュージアム、中村知事が市長の1期のときに取り組まれたという本当に素晴らしいミュージアムを見学させていただきました。

私も、坂の上の雲は本当に、もう大変必死でと言いますか、最初、第1巻から文庫本で呼んだのですけれども、最後まで、バルチック艦隊がなかなか日本まで到着しないなどいうのをこう思いながら、読んだ覚えがありますけれども、歴史の背景でありますとか、それから何よりいろいろな関係の方々の品物でありますとか、そういうものも間近で見せていただきまして、大変感動いたしましたし、さすが歴史と文化の松山市、前にお伺いしたときは実は松山城を見せていただいて、ロープウェーで上がって、本当に素晴らしいお城だなというふうに感動をした覚えがありましたけれども、また坂の上の雲ミュージアムという素晴らしいものを見せていただいて、本当に心から感謝申し上げたいと思います。

今日の観光それからサイクリング、それから防災、それから広域ネットワークでございます。いずれも私どもにとりましても大変重要な課題でありますし、また今日、意見交換させていただきました、愛媛の皆様も重要な課題と認識しておられて、そして、一緒に連携をしながら取り組みをさせていただきますと、本当に私共にとっても大変ありがたいことでもありますし、また、お互いに貢献できるようなテーマではないかなというふうに思っております。

これからまたぜひ、このような機会を持たせていただきまして、連携を深めていければというふうに思います。また、次回はぜひ今度大分にお越しをいただきますとありがたいと思いますので、お待ちしております。

今日は本当にありがとうございました。

(愛媛県 企画振興部長)

佐藤知事、ありがとうございました。

本日は終了させていただきますけれども、大分の関係者の皆様、それから、本日、ご案内いただきましたミュージアムの関係者の皆様にも改めて御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

それでは、令和6年の愛媛・大分交流会議を終了いたします。

5 終了後の囲み記者会見

日時：令和6年10月28日(月) 16:20～16:40

場所：坂の上の雲ミュージアム2階ホール

(愛媛県 企画振興部長)

それでは、これより記者会見を行います。

時間は16時40分までとさせていただきます。

ご質問のある方は挙手のうえ、社名とお名前をおっしゃっていただきながらご質問をお願いします。

挙手していただきますと、係の者がマイクをお持ちします。

それでは、どなたからでも結構ですので、よろしくお願いいたします。

(NHK)

まずもって、両県知事には本日の交流会を終えての御所感をお伺いしたいのですけれども、その中で、九州・四国というのを超えて、お互いの県が意見交換する意義・重要性について、また今後、交流会議をどのように発展させていきたいかについてお伺いします。

(愛媛県 中村知事)

皆さんもご存じの通り、大分県と愛媛県は海を挟んだ隣県でありますから、昔の思い出で言うと、大体今のおじいちゃん・おばあちゃん世代は、新婚旅行というと、別府温泉に行くという人がすごく多かったのですよ。僕らも子供の頃に、三津浜港から船に乗って別府に向かう人、新婚旅行や旅行に行く人は、当時は許された紙テープ、船が離岸するとき紙テープで結ばれて、ドラが鳴って、ポーっという汽笛とともに去っていくシーンは、子供心にすごく焼き付いていまして、そういう意味で、大分県は、九州の中では特別な、身近な県という感じがしています。

それから、産業交流も盛んで、大分のみかん農家の方で愛媛県出身の方が結構多いのですよね。その関係で、愛媛県の地銀の支店が、そういう背景があればこそ大分にあるという繋がりもあって、海を挟んでいるのだけれども、かなり結びつきが強いというふうに思います。

先ほど八幡浜市の話もそうですし、残念ながら海で隔てられてはいるのですけれども、昨今の東九州自動車道の完成で、明らかにフェリーの利用客が全国でここだけと言ってもいいぐらい増えた経緯もあって、そのルートの直線距離でいったら関西圏と九州を結ぶということを考えても、非常に重要なルートなのではないかなというふうに思います。

あとはそれをより良いものにするために、意見交換を通じて、これからも追い求めるべき課題を共有するというのは、非常に意味のあることではないかと改めて感じました。

以上です。

(大分県 佐藤知事)

私の方も、隣県としていつも私が言いますのは、福岡、熊本、宮崎と愛媛が大分県の隣県というふうに申し上げております。特に愛媛とは、先ほどの他の3県以上に、多分海上交通が昔は非常に重要だったと思うのですけれども、例えば、別府温泉の観光の元も、やはり愛媛から来られた方が起こしていますし、それから銀行も、大分の中小企業の大方のメインバンクが伊予銀行で、非常に多いです。

それから大分のみかん農家の方が、愛媛の農業大学校に行って、みかんづくりを勉強して、津久見などを好きで作っていますという方も、たくさんいます。

そういういろいろな形で、昔から関係が深かった上に、先ほどの観光もそうですし、産業もそうでありますし、いろいろな意味で、瀬戸内文化圏の両県としまして、一緒になって取り組むと、非常に両県にとってメリットがあるといえますか、有益なことが多い、そういうテーマがたくさんあるということで、県以外でも、例えば市町村同士でも、それぞれ交流が、中村知事さんも市町さんでいらっしゃったのだけれども、特に八幡浜とか、伊方町とか、大洲市とか、いろいろなところと大分の特に海岸部といえますか、瀬戸内側の市町村が連携しながら、交流を深めるということをやっております。

そういう関係をさらに深めていく、今日また新たな1歩が踏み出せたのではないかなというふうに思います。

(NHK)

あと一点だけお願いします。

私も大分市の出身でして、豊予海峡ルート、本当に他人事ではないと思っております。今のお話の中にもありましたが、改めて両県でこれを国への要望も含めてやっていかれるのかということをお聞かせください。

(大分県 佐藤知事)

先日も、豊予海峡の連絡協議会のようなものがありまして、これは両県の知事が幹事ということになっております。その活動の一環としまして、しばらく文書を配布するだけだったのですけれども、このときは私とそれから愛媛県の副知事さんと一緒に国交省等に要請をさせていただきましたけれども、もちろん私たちの気持ちとしては豊予海峡ルート実現させて欲しいのですけれども、まずはやはり調査とか、例えば下北道路っていうのがありますね、下関北九州道路、あれも国の調査から始まりまして、今、環境影響評価の段階に入っている。第3関門海峡です。そういうふうな手順というものが有りますので、そういう意味ではまず国が今、実際は凍結の形になってはいますが、それを解除して調査を始めていくという、そういうところから両県で協力をして、取り組むように国に要請をしていくということができればというふうに考えております。

(愛媛県 中村知事)

これは、昨日今日降って湧いた話ではないということは、先ほどのやりとりの中で、お分かりいただけたと思うのですけれども、凍結ということは、かつて計画しようとしていたという証、それから技術的には実現可能だという結論も出ていた証だと思います。

要は、問題はやはり、先ほど言った国家戦略の中で、大胆なビジョン、まちづくりもそうだと思うのですけれども、トップビジョンが無かったら、やはり方向性が定まらないので、迷走するということ言えば、国に対してそういったビジョンの中で考えてもらいたいというふうなことを、声を大にして言う時期なのではないかなというふうに思っています。

そのきっかけを作るのが、この両県の交流会議になるのではないかなというふうに思っています。

(愛媛新聞)

関連での質問です。

豊予海峡実現に向けての産業振興のお話等がありましたけれども、改めて両県にとってどのような意義があるとお考えでしょうか。

(愛媛県 中村知事)

今、東京一極集中がよく話の俎上に上がるのですけれども、東京に一極集中する先に何があるのかというのは、本当に今の人口減少社会で言えば、全体の衰退に結びつく可能性が高いと言わざるを得ない。

そうではなくて、もう限られた国土しかない小さな面積の国ですから、それをどう有効に使いながら未来を考えていくかというビジョンの中で位置付けていくと、地方というのは非常に可能性が、伸びしろがあるということだと思います。

その伸びしろを現実のものにするためには、社会インフラをどこにどうてこ入れしていくのか、優先順位を高めていくかということに尽きるのだらうと思うので、そういう観点で動いて欲しいのだけれども、なかなか我田引水的な政治、それから、特にこれから政局が混乱する可能性が高まってきているので、もっとスケールが小さくなってしまう可能性があるかもしれないというところには非常に危惧しているので、むしろ地方から大胆な声を上げるというのが、逆の意味で重要になってくるのかなと思います。

(大分県 佐藤知事)

例えば、災害に強い国土づくりという意味では、先ほどの伊方の面も含めて、やはり陸路、そして例えば山陽道でありますとか、山陽新幹線が止まったときの本州からのルートとして、四国を通過して九州に入ってくる。そういう意味で、災害にレジリエンシーの高い国土づくりという点もあります。

産業の面で言いますと、例えば、先ほどの TSMC が今中九州横断道路の熊本のところ立地しておりますけれども、それを契機として半導体の集積が進もうとしております。四国

もたくさん半導体のメーカーさん、大分にも立地していただいております住友化学さんとか富士紡さんというのは、例でいうと、半導体の材料でありますとか、洗浄剤とか、そういうものを作っている。これ、両県に同じ会社が立地しておりますけれども、その行き来が非常に便利になることによりまして、この中九州横断道路から、豊予海峡ルート、さらにそこから四国に入っていくこの一帯が半導体のベルトになるような、そういう効果も期待されます。

観光も同じであります、これはちょっと非常に卑近な例でいうと、別府温泉を楽しんで、それからすぐまた道後温泉を楽しむとか、そういうふうな交流が非常にやりやすくなる。

今日も議論させていただきました欧米の方々のインバウンドも増えてきておりますけど、そういう方々はやはり、例えば、どうしてもぐるっと高松周りで松山に来られる方が多いというふうにも聞いておりますけれども、九州というのは非常に今、観光客が増えてきていますから、そういうところから直接愛媛にお伺いする方が増えてくるとか、そのようないろいろな大きな効果が期待をされますし、そのような中で、日本地図全体を見渡したとき、この豊予のところはミッシングリンクであるというのが非常によくわかると思います。こういうところをB/Cの高いところ、そういうところに国として投資をしていくということが重要じゃないか。

先ほど、中村知事から八幡浜と別府のルートがどんどんどんどん利用者が増えているという話がありました。そして同じように、三崎と佐賀関の方もどんどんどんどん増えております。これは物流が増えていくことに伴って、こちらは物流も多いですし、もちろん観光客の方も多くですし、バイクのツーリングの方も多いです。どんどん増えております。船の数も増えています。

そういう中で、やはり14キロしか隔てられてないここを、繋ぐことによりまして、飛躍的に全体としての交流を促進する効果を高めていくことができるというふうに考えています。

(日本経済新聞)

どちらにお聞きするのが適切であるかは分かりませんが、前回の愛媛・大分交流会議の開催が2017年だったと思いますけれども、約7年ぶりにこういった交流会議を開いた背景と今後はどういったスパンでこういった交流会議をやっていききたいとか、そういったビジョンがあればお伺いしたいです。

(愛媛県 中村知事)

実は、前の広瀬知事さんと知事会でお会いしたときに、九州は九州で隣県と会議をやり、こちらはこちらで、例えば高知と、或いは四国で会議もやって、広島でもやっておりますけれども、そんな中、大分と愛媛の結びつきを考えたらあってもいいですねなんていう話をしたところから始まったのですね。

お互いでやっていたのですが、広瀬知事がご高齢であること等に鑑みて延期になった記憶があります。そのあと、コロナに突入してしまったので、ちょうどそういったものが重なり合って、久々の再開ということになりました。

(大分県 佐藤知事)

そのように伺っておりますけれども、特にコロナが影響したというふうに聞いておりますけれども、先ほど来申し上げておりますように、大変重要な隣県との協力・連携を議論する場ということで、ぜひ毎年開催いただけるとありがたいなと思います。

(愛媛県 企画振興部長)

他にご質問はございますか。それでは、以上をもちまして、記者会見を終了いたします。本日はありがとうございました。

(両県知事)

ありがとうございました。

終了